



長光寺正面の観世音菩薩様



第23号

玉寶山 長光寺

〒169-0073

東京都新宿区百人町1-5-2

TEL:03-3209-5360

FAX:03-3200-7026

<http://www.chokoji.net/>

三千世界 一度に開く 梅の花

松倉 太鋭

三千世界とは宇宙全体を意味します。春まだ浅い中、百花に先駆け
て梅の蕾が綻び、宇宙全体が清々しい香りで満ちている様子を詠ん
だ句です。

しかし、梅の花の香りは沈丁花や木犀のようにハッキリとした香
りではありません。近づいてみないとよく判らない微かな香りで
す。その微かな香りが大宇宙に充ち満ちているとは一体どういうこ
とでしょうか。

室町時代の禅僧別源円旨老漢は「花を看(み)るに須(す)べからず
看(かん)花(か)の眼(まなこ)を具(ぐ)すべし」という言葉を残して
います。花を見るとときには花を見る目が必要だということです。美
しい花をただ「綺麗だな」と表面的に見るだけでなく、その花が開
くまでの様々な過程や、美しい花もやがては散ってしまうという事
実に目を向けられる人こそが、今、精一杯に咲いている花のいのち
を愛でることができるとい意味でしょうか。

さて、春になれば自然と梅の花は綻びます。それを見て私たちは
季節になれば花は自動的に開くと考えがちですが、果たしてそうで
しょうか。

おそらく梅の蕾は真冬のこごえるような寒さに耐え、時には降り
積もる雪を押しつけて自ら花を咲かせるのです。それは梅の花の主
体的な働きです。そうした生命の働きは何も梅の花にはかぎりませ
ん。自然界の生き物は、みなそれぞれに、今この時を精一杯に生き
ているのです。だからこそ大自然の営みは美しいのでしょう。そし
て私たちも大自然の一部です。

今この瞬間も私たちの身体の中では心臓や肺などがそれぞれに精
一杯は働いてくれます。そうした生命(いのち)の働きのおかげで私
たちは生かされているのです。しかもそれら一つ一つの細胞には寿
命があります。実はこの宇宙に充ち満ちる大自然の生命(これを仏
という)そのものに寿命はありません。

ではどうすればそうした大自然の恩恵に報いることができるので
しょうか。それはお互いに自らの人生を精一杯生きることです。ど
んな状況でもこの自分の務めを果たすこと。それが大自然に報いて
いくことなのです。

「雪に耐えて 梅花麗(うるわ)し」

先年引退した広島カープの黒田博樹投手の座右の銘だそうです。

長光寺の変遷

平成十年六月に曹洞宗管長よりの住職辞令が下りてより、現在に至るまでの伽藍整備のことを記そうと想うと、走馬灯のようにいろいろな思いが浮かびます。それは有り難く感謝することと、ほろ苦いものとに分かれます。住職に就任するや、すぐに役員会を招集しての課題は言うまでもない本堂の再建でした。

役員会の意見は、

(1) 本堂建設なくして長光寺復興はないという意見。

(2) バブルが崩壊して不況下にあった経済状況から、暫く様子を見てから、建設すべきという意見。

当然ながら二つの意見に分かれました。住職はどちらかと言えば(1)の意見でした。総代さんであった長老の意見は、当然、慎重に行くべきだ。という意見でした。両論併記では事業は進みません。住職の蛮勇ともとれる伽藍整備を急ぐべきだ、という意見に、やむなく総代さん達も賛意を表して下さいました。今から思えば冷汗ものでした。

賽はふられ、直ちに本堂建築用地の整備(墓地の移転)と、本堂の設計に着手。しかしながら前庭にあった墓地を移転しなければなりません。今でも感謝するのは前庭の山田家と小宮山家、更に本堂建設の敷地となる裏手にあった、各家皆様の協力が得られたのは本当に僥倖であったと思います。

平成十二年に仮本堂建設。と同時に、上棟式を挙げて本格的な建物である、地下一階、地上四階建の鉄筋コンクリートの建物に着手いたしました。勿論、資金的にも確約があつて始めた建築ではありませんでした。平成十一年六月より、平成十三年の四月の落成式まで、およそ二年間の出来事は、夜を徹して語らなければ、語り尽くせないほど多くあります。しかし、特記すべきは、その間に多くの檀家の皆様の御協力と支援をいただきました。とくに檀家外の方の御寄附には随分と助けられました。

時には非合法の裏社会からの執拗な恐喝もありました。そんな時は、こんな繁華街で本堂建設を始めたばかりに、こんなことになってしまい、建設中の建物を恨めしく眺めたこともありました。新宿警察署に

行き、暴力担当の刑事さんに窮状を話して、対応を協議もいたしました。そんな挫けそうな時に慰めになったのは、早朝から一生懸命に仕事に精出す現場の職人さん達でした。孜々として働くその後ろ姿に、無言の励ましを受けました。また、近隣の地域住民よりの各種難題も多くありました。しかし、運よくそれらを切り抜け、どうやら落慶式を迎え、引き続き晋山結制という正式の住職披露も行うことができました。後日談ですが、周囲の寺院さんも、「よくあそこで本堂を建設したものだ」と、なかばあきれ顔で見えていたようでした。

宿願の本堂が完成しましたが、資金不足から未完成のままであった地下室を、どうしたら良いか思案しておりました。本来ならば静かな地下で坐禅会をしたいものだと考えていたら、意外なことに檀家外の篤信者から坐禅堂の建設費を寄進したいという申し出がありました。そこで有り難く厚意をいただき、翌年平成十四年に地下の坐禅堂も完成しました。平成十五年十二月には曹洞宗での正式な認可参禅道場となることができました。ここから本格的な都心での参禅会がスタートすることとなりました。

次いで平成十七年の五月に梅花講の認可が管長によって認められ、隣寺の観音庵のお力添えをいただき長光寺梅花講が産声をあげました。また、翌年には気が付いたら写経教室も始めることとなりました。

思えば立て続けにこれらの活動が行われるのも、やはり本堂の完成があつたからであり、近代的な音響と冷暖房設備がありますので、そのまま講演会や落語会にも利用することも出来ました。建設の御協力をいただいた皆様に、心より感謝の気持ちで活動を行っております。

陰に陽に御協力をいただいた皆様に、この紙面を借りて感謝申し上げます。



建設当時の長光寺。まだ門や石畳みがなかった。

寄稿 身体制御大切

慇懃三郎

「亦云わく、道を得ることは心を以て得るか、身を以て得るか。(中略) 然あれば心の念慮知見を一向に捨て只管打坐すれば道は親しみ得るなり。然あれば道を得ることは正しく身を以て得るなり。(後略)」
 正法眼蔵随聞記(岩波文庫・和辻哲郎校訂版)の第二・二十六から(身体に言及した部分の)摘みみ食いです。

また、打坐中の身体について、道元承陽大師は普勸坐禅儀で、更に瑩山常済大師も坐禅用心記に、それぞれ「兀兀として坐定し」とか「兀兀として端坐すべし」などと説かれています。

その「兀兀」を字通の中で、白川静先生は「石山などの高くそびえるさま、ひとり寂しいさま、動かぬさま、知覚のないさま。」と説明されています。当玉寶山の一滴道場では「住職松倉太鋭和尚が、時に「止鐘がはいりました。動いてはいけません。」と注意されます。

過年、巨福山建長寺で臘八撰心の一夜を過ごしました。黒衣長袖の雲水連が、足裏をきれいに返して坐定する姿は、まさに兀兀たる雰囲気に満ちたものでした。在家の老骨生は黙々と坐る雲水連の後背の鋭さに迫られ、眩しさを覚えたことを想い出します。その姿は、言語不及の境涯境智を雄弁に語っていました。

この辺りの事情は、一老修学人の思い込みかも知れません。しかし、身体を、即ち身体所作、動作を制御する大切さは究極、自己と他己を大切な事にしようとするに通じると考えます。

あえて飛躍して云えば、自らの挙手投足の一つ一つの身相に意を注ぎ、呼吸と吸気に意を集中する先に、随聞記にいう「道」が見えてくるのではないでしょうか。

そして、更にその先には、長沙景岑の「尽十方世界是レ沙門ノ眼、尽十方世界是レ沙門ノ全身、尽十方世界是レ自己ノ光明」の宇宙が、慧鶴白隠の「三昧無碍の空」が、ひろびろと広がっているように思えるのです。了

坂東観音霊場巡拝

今年の秋も坂東観音霊場巡拝に行って参りました。今回は茨城の山奥ということもあり、バスを乗り継ぎながら二ヶ寺を巡拝してきました。妙福山佐竹寺と八溝山日輪寺の二つです。

妙福山佐竹寺は戦国武将佐竹氏と歩んできた寺院です。源義光の孫、初代佐竹昌義公は寺院の境内にある奇竹を見て、これを出世の瑞兆とし、佐竹と改名したそうです。町中にありながら静かな雰囲気を持つ穏やかな寺院でした。

もう一つの八溝山日輪寺は修験道の開祖である役小角が建立したと言われております。修験者が集まった寺院だけあって山奥にあり、道が厳しくバスを小型のものに替えてお参りしてきました。あまりに道が険しく、登らずに巡拝を済ませてしまうものが多くいた為「八溝知らずの偽坂東」という言葉があるくらいです。坂東観音霊場の中でも最難関といわれております。

今回は距離と時間の関係上二つしか巡拝できませんでしたが、それではもったいないということもあり、近くにある袋田の滝にも行って参りました。ちょうど紅葉が見頃を迎えていたこともあり、景色が大変美しかったです。四季折々に様々な姿を見せる滝ですので、機会がありましたら他の時期にも行ってみたいと思います。



施食会のお知らせ

来年もまた五月二十三日に施食会を行います。一年に一度のご先祖様の供養なので、どうぞ奮ってご参加下さいますようお願い申し上げます。

墓地管理料について

墓地管理料なのですが、同じ名字の方が多いため今後はフルネームを書いていただけるようお願い申し上げます。お手間をかけて大変申し訳ありませんが、どうぞよろしくお願い致します。

賽銭箱について

長光寺には表に賽銭箱を設置しております。しかしお参りした際にお賽銭が弾かれて飛んでしまうというお声がございましたので、この度弾かれないように囲いを設けました。並びに裏にある北向き観音様の場所に以前から要望のあった賽銭箱を設置致しました。どうぞよろしくお願い致します。

長光寺の年間行事 (平成三十年)

一月一日〜三日	大般若祈禱
二月十五日	涅槃会
三月	春の彼岸会
四月六日	花まつり
春予定	坂東観音巡礼
五月二十三日	施食会
七月	盂蘭盆会
九月	秋の彼岸会
秋予定	坂東観音巡礼
十二月一日〜八日	臘八悟心
八日	成道会

その他月行事として第一、第三土曜日に経験者様向け坐禅会。第二土曜日に初心者様向けの坐禅会を、どちらも十四時から行っております。初心者様向け坐禅会に關しましては予約が必要となります。また梅花講を第二、第四月曜日(変更あり)に行っております。詳しくはホームページをご覧ください。年間行事、月行事、どなたでも参加できます。是非体験してみして下さい。

編集後記

◆変化する社会

昨年度から今年に掛けて幼稚園の学童クラブにて働いておりました。今まで子供に何かを教えるということがあまり無かったので色々と手探り状態でした。子供との接し方だけではなく、親御さんとの接し方というのも非常に勉強になったと思います。子供と接してみると私が子供の時と今の子供は大分違うとしみじみ感じました。私たちとは違う価値観で育った子供が大人になった時、私たち僧侶も今まで通りというわけにはいかないでしょう。変化する社会に合わせて変えなければならぬことも多くあるかと思えます。私たち長光寺も、これから大人になるお檀家さんと共に新しいお寺を作り上げていきたいと思えます。

(徳允記)